

### 第3章 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 I

伊藤淳史 富井 眞

#### 1 調査の概要

調査地点は京都市左京区岡崎成勝寺町に所在し、鴨川の東方約700m位置する（図版1-463地点，図39）。古代末の白河街区の範囲に含まれ、六勝寺のひとつ延勝寺の跡地に比定されているとともに、下層には弥生～古墳時代を中心とする岡崎遺跡のひろがり知られてきた。現地では1972年にアパート建設に先立つ発掘調査が実施されており、池汀らしき落ち込みや瓦溜まりなどが報告されている〔六勝寺研究会1972〕。また、南側隣接地も近年調査され、井戸や多量の瓦を包含する整地層の広がりなどが確認されている（図39-A）〔京都市埋蔵文化財研究所2014〕<sup>(1)</sup>。今回、敷地を購入した京都大学が既存のアパートを取り壊し、岡崎国際交流会館を新設することが計画されたため、2017年7月19日に試掘調査を実施し、既存建物周囲には遺跡が良好に遺存していることを確認したうえで、1972年の調査区を含む予定地全面516㎡について、2018年7月23日～11月9日に発掘調査した。なおこのうち、掘削土置き場の都合から、調査区東南隅の70㎡程度については10月23日以降に調査している。

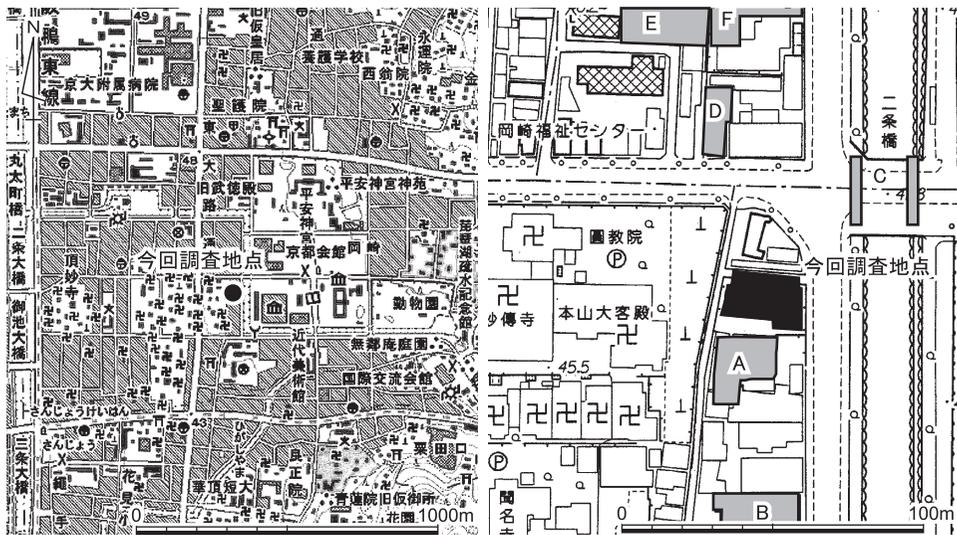


図39 調査地点の位置（左1/25000，右1/2500）

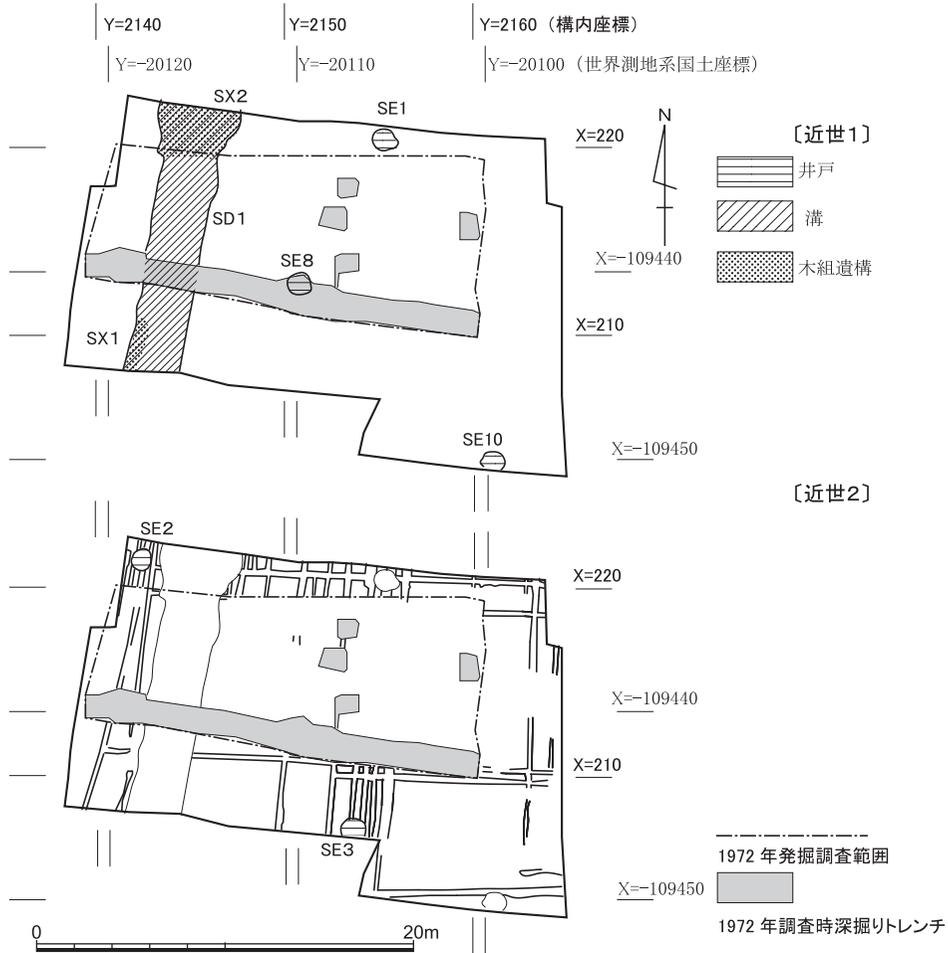


図40 遺構配置概略図(その1) 縮尺1/400

調査の結果、1972年の調査範囲においても(図40の一点破線範囲)、深掘りされたトレンチ部分を除いて、現地表から1m程度の深さに平安後期～鎌倉前期の黒褐色土層(同図基本層序の第5層)以下の堆積がほぼ残されていることが判明し、その周囲の未調査範囲では、中・近世の遺物包含層(第2層～第4層)も良好に遺存していた(図版10上段)。これら各層について、面的な遺構検出と掘り下げを順次進めたところ、近世については南北大溝や井戸、古代末～中世前期については複数の井戸や土器溜・瓦溜のほか方形の石敷土坑(SK1)、弥生～古墳時代については流路内からまとまった土器の出土をみるなど、各時期にわたる多様な成果があり、出土遺物の総量は整理箱240箱に及んだ。とくに、方

調査の概要

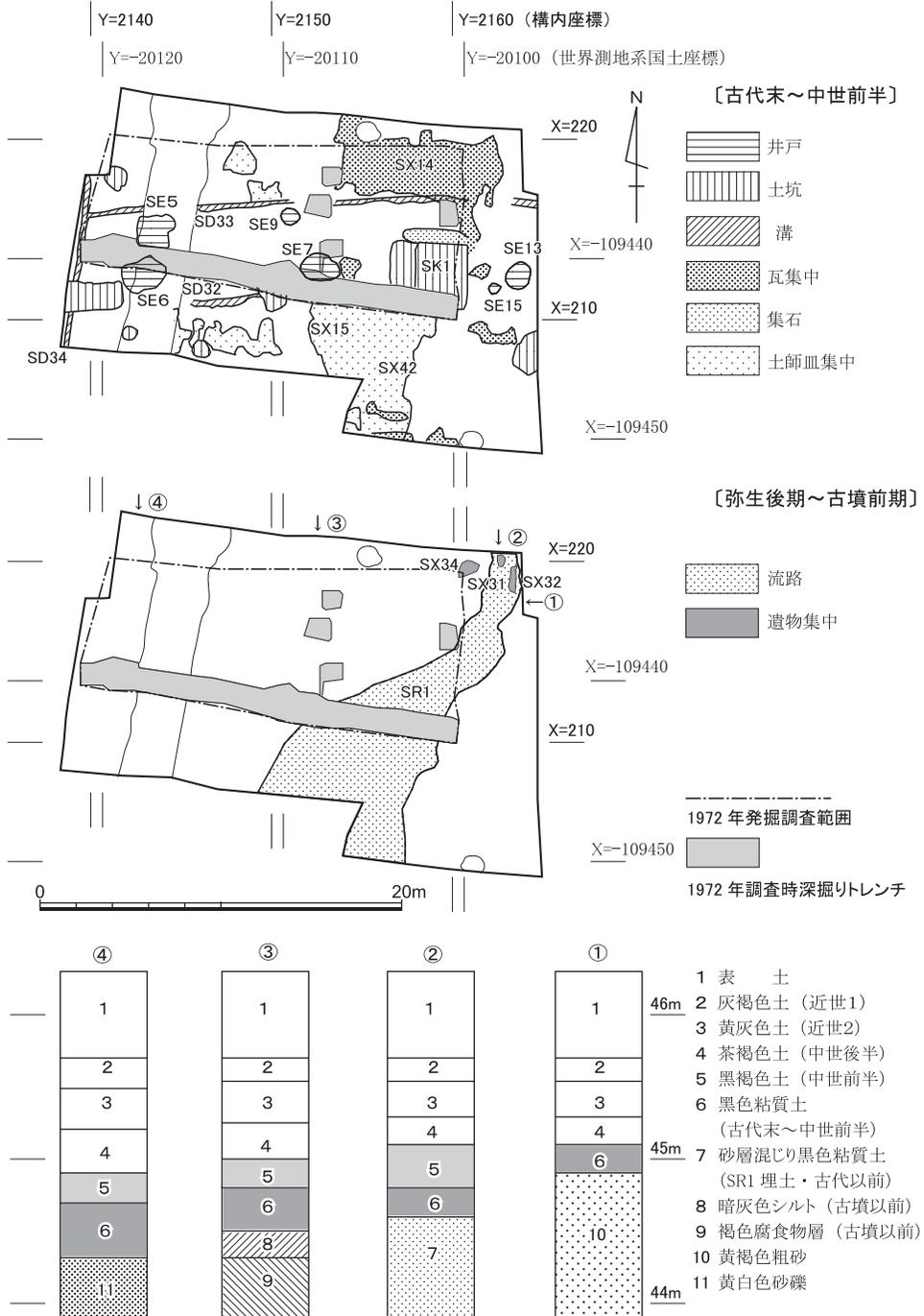


図41 遺構配置概略図 (その2) 縮尺1/400および調査区基本層序 縮尺1/50

形の石敷土坑（SK1）については類例を見ない貴重な事例であることから、重要性に鑑みて10月5日に近隣住民と関係者を対象に現地公開した。

以下、本節ではそれぞれの時期ごとの概略を示し（図40）、次節以降で層位と近世の調査成果について詳しく報告する。なお、中世以前の成果については、ここでの概略のみとし、来年度の年報において詳報する予定である。

**近世の遺跡** 黄灰色土（第3層）の上面で検出された近世1、茶褐色土（第4層）上面のそれを近世2としている。近世1についてはおおむね幕末期前後、近世2はおおむねそれ以前の江戸時代とみられる。近世1については、上面が削平されている範囲も多く、深い掘り込みをもつ井戸3基と南北大溝の確認にとどまる。このうち注目されるのは、幅3m深さ2m前後の大規模な南北大溝SD1で、丸太や板を組み合わせた護岸や堰ないし橋状の木組遺構SX1・SX2をともなっていた。調査地は近世岡崎村の西端に位置していると同時に、幕末期に設置された加賀藩邸敷地の西辺にも比定され、それらの土地境界との関連が注意される。近世2では、遺存している範囲全面で、黄灰色土を埋土とし、わずかに東に振れる方位をもつ南北・東西方向の小溝群が検出されている。耕作にかかわるものであろう。幕末に至るまで長らく耕作地であった様子がうかがえる。

**古代末～中世の遺跡** 茶褐色土（第4層）には中世後半期の14～15世紀代の遺物がわずかに包含されるが、この時期の遺構は全く確認されない。黒褐色土（第5層）および黒色粘質土（第6層）中には、12世紀後葉～13世紀前葉ころに比定される段階の土師器とともに陶磁器や瓦類が多量に含まれており、全域からこれらの遺物集中部をはじめとして、土坑・井戸などが多数見つかっている（図版10下）。なかでも注目されるのは、底面に角材を井桁状に組みその内部を石敷きした方形土坑SK1であり、類例のない特異遺構として性格の検討が課題となる。また、井戸や土坑内では木製遺物が良好に遺存しており、井戸の水溜として据えられた曲物のひとつに墨書が確認されていることも特筆される。

**弥生後期～古墳前期の遺跡** 調査区の東辺では、基盤の黄褐色粗砂層（第10層）が高まっており、西へと下る斜面地が形成され、その裾部を蛇行するように砂層をまじえた粘質土を中心に埋積する流路SR1が把握された。また、その西肩一帯にもシルトや有機物の腐食層がひろがっていた。これらの埋積の上部を中心に、弥生後期末～庄内式期の土器が多数出土しており、とくに調査区東北部の斜面裾には良好に遺存する個体が集中する傾向がみられた（SX31・32・34）。調査地の東～北方の微高地となっている範囲に、岡崎遺跡にかかわる居住域や墓域などが展開している可能性を示唆する情報と言えよう。

## 2 層 位

本調査区の現地形はおよそ平坦で、標高は46.3~46.6mをはかる。調査区には中央一帯に1972年の発掘調査区が内包されていることから、地層の断面観察はおもに北壁と南壁でおこなった(図版13, 図42・43)。第1層の表土・攪乱は、厚さ80cm程度。底面は平坦なので、広く均質に削平したことがうかがえ、そこから上位50cmの厚みで砂質土と粒径10mm程度までの灰白色粗砂との互層が、西下がりである。ここまでは明治時代の堆積と思われる。近代に、東方から土砂を投じて一帯を大規模に造成したことがうかがえる。

第2層は灰褐色土で、層厚は20cm前後で底面は平坦である。幕末から明治にかけての堆積と思われる。機械により掘削した。窪みや遺構に堆積している部分(第2'層)には黒色粘質土のようなブロックが目立つ。

第3層は黄灰色土で、江戸時代の堆積層である。調査区の南辺および北辺にのみ残存していた厚さ30cmほどの耕作土で、底面はおよそ平坦である。北辺では、基質の違いで3細分でき、上位(第3 a層)と下位(第3 c層)は基質が砂質だが中位(第3 b層)はシルト~粘土質で、粒径が10mmを超えるような礫はおもに下部にしか認められず、そうした大きさの礫はほとんど堆積岩である。ただし、Y=2156辺りから東側の第3 b層は、徐々に、基質が粗くなるとともに内包される10mm台までの砂礫の比率も高くなり、第3 c層との境界が不明瞭になる。また、南北大溝SD1以西では、下部ほど基質が粗粒だが、中部から上部にかけてでもシルト質~粘土質になる部分は抽出しづらい。

これに対して南辺では、およそ上位10cmと下位5cmは、基質が粘土からシルトで、内包される砂粒も5mm程度までの花崗岩および堆積岩だが、中位は砂質で、含まれる砂粒も10mm程度までのものが主体で30mm台の堆積岩も散在する。第3層の内部に見られる堆積物の様相が南北で対応しないが、第2層の底面も第4層の上面もおよそ平坦で南北で標高がほとんど変わらないことから、その原因は、堆積の前後の整地や削平による掘削深度の違いとは考えにくい。第3 b層はSD1の埋土に連なることがうかがえるように(図版13-3)、大溝SD1を流れる水が溢れたときに第3層の基質となる碎屑物をもたらされたと考えられるならば、大溝から溢れるときの水流の強弱を反映しているのかもしれない。

第4層はおよそ砂質の茶褐色土。中世後半までの堆積層である。礫の種類や大きさは第3 c層と同様だが、遺物を多く含む。北辺には第3層との境界付近には黒みがかっている部分がある(第4 a層)。

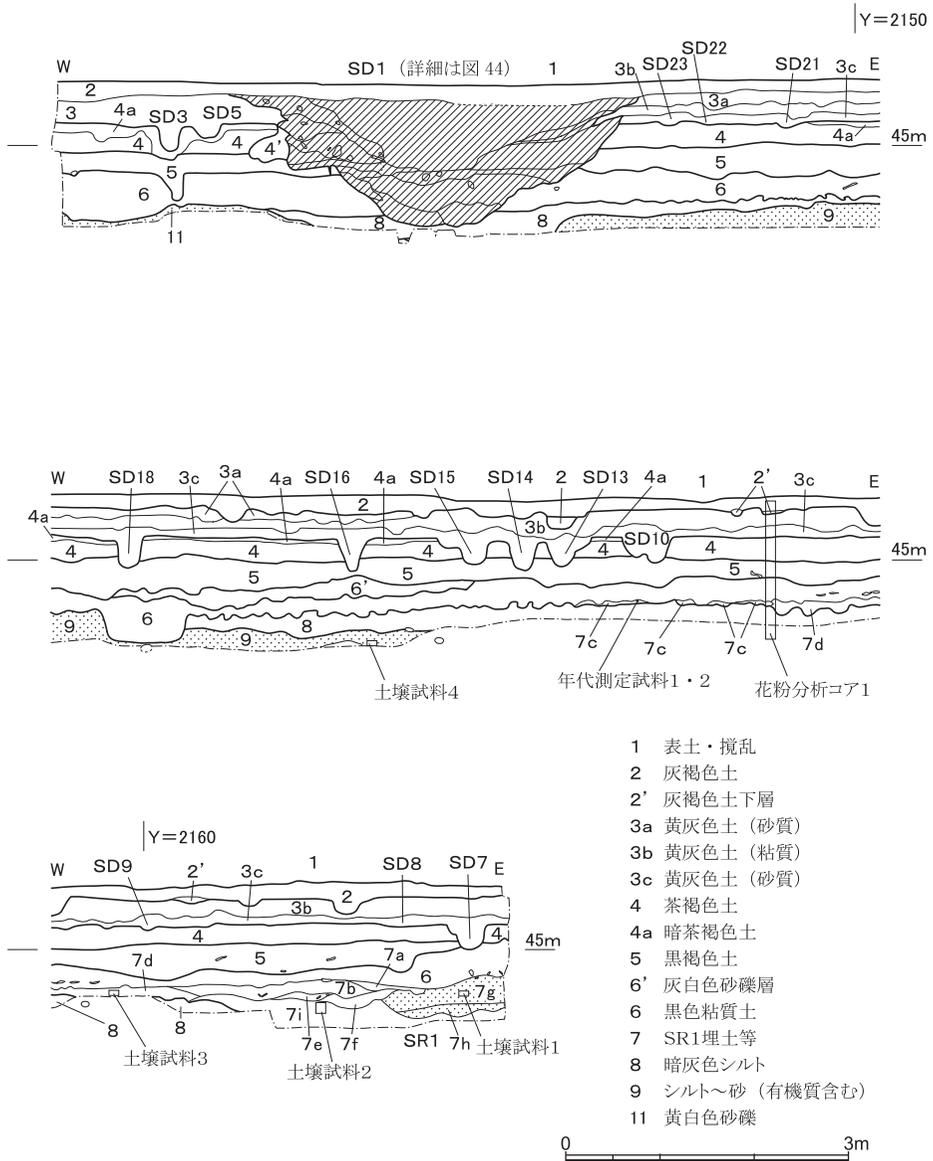


図42 北壁の層位 縮尺1/80

層 位

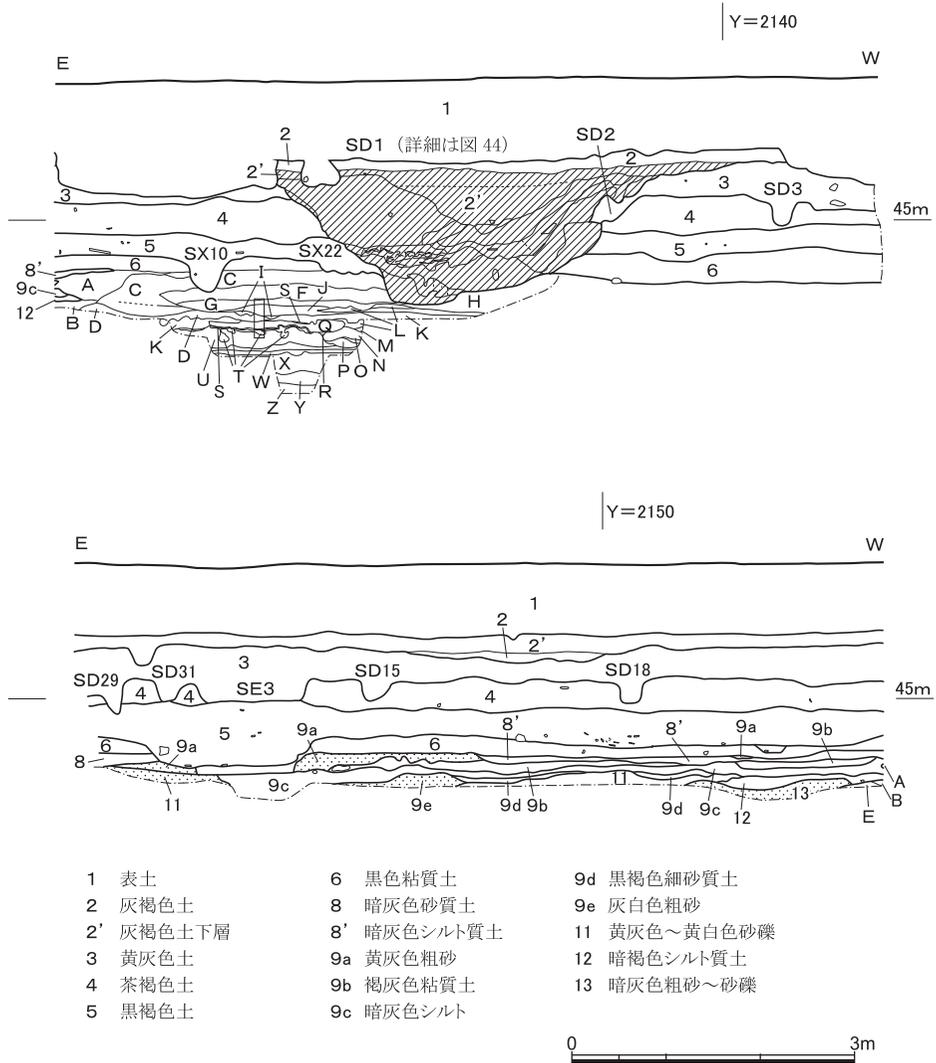


図43 南壁の層位 縮尺1/80

第5層は黒褐色土で、基質は第4層と同様で色調が漸次的に変化しており、遺物も中世前半までしか含まない。含有物については、礫は、種類は第4層と同様だが大きいものが目立つようになる。炭化物も目立ち、遺物量も多くなる。

第6層は黒色粘質土で、遺物は量がかなり少なくなるが年代はあまり変わらず、基質や粘性は、西辺および北辺では、第5層から漸次的に変化している。北辺では、Y=2151～

2155辺りの第5層との境界に、径100mm大の礫を含む粗砂が分布する土石流状の堆積物がある（第6'層）。また、Y=2158～2159辺りには灰白色砂が点々とレンズ状に入るので、時折小さな出水があったことがうかがえる。

第7層は、調査区東半の自然流路SR1やその出水にかかわる堆積物。

第8層は暗灰色シルト。北辺では、Y=2154辺りを境に、西は木片や炭化物を多く含むが、東は分解が進んでいて有機質が少ない。南辺では、Y=2155以東は砂粒が少なく有機質が多いが、以西では砂粒が多くて有機質が少なく土壌化が進んでいる。出土遺物から、弥生時代後期頃までの堆積と思われる。なお、北壁のY=2148～2158辺りでは上部が波打ったように変形しているのを確認できる。第6層が堆積している間の滞水期に地震があったのかもしれない。

第8層の下位の堆積は複雑で、まとめて第9層とした。出土遺物から、これも弥生時代後期頃までの堆積と思われる。北辺では、腐食層や有機質を多く含むシルト～粗砂までの砂層が堆積しており、東側ほど木片の多い腐食分が目立つ。南辺では、北辺よりも土壌化が進んでいるが、北辺と同様に有機質を含む砂層が、分布する部分もある。北壁の堆積を見ると、Y=2151以西は最上部に青灰色シルトが堆積する。その下位は有機質を多く含む細砂から粗砂の水性堆積層と腐食層の互層で、Y=2151～2154にかけてはその互層が最上部となって、青灰色を呈するシルトは直上の第8層に斑状にくい込むようにしか分布しない。北辺はあまり安定的でない環境だったといえる。南壁の堆積では、上部に有機質をあまり含まない粒径5mmくらいまでの粗砂（第9a層）や分解が進んだ土壌化層（第9b層）が堆積するが、その下位には有機質を含むシルト（第9c層）や粒径3mm程度までの粗砂（第9e層）、あるいは土壌化層（第9d層）が堆積するので、南辺は、北辺よりは安定的で陸化しやすかったのだろう。

第10層は、自然流路SR1の東肩となっている粒径10mmくらいまでの黄褐色粗砂で、東壁際の北半でしか分布を確認できなかった（図41-①）。遺物も認められない。

第11層は黄白色～黄灰色の粗砂を主体とする無遺物の砂礫層。北壁では、Y=2144以西で確認できた。上部は花崗岩が主体の3～5mmの粗砂で下部は粒径20～30mmの堆積岩も含むようになる。南壁ではY=2150以東を確認でき、10mmくらいまでの花崗岩と堆積岩が認められる。北壁と南壁の第11層が一連の堆積かどうかは不明。

南壁では、第11層の下位に無遺物で有機質を多く含む土壌化層（第12層）や同じく有機質を多く含む無遺物の上方細粒化する砂層（第13層）が認められる。

## 近世の遺構

調査区東南辺には、第6層の下位に青灰色を呈して上方細粒化する粒径が1mmより小さい厚い無遺物の堆積が認められた(図43のA～Z層のうちのC・F・G・H層)。この層群の東縁(Y=2147辺り)は、非常に硬質であるとともに、5mmくらいまでのおもに花崗岩の砂粒を含むようになり、黄色味がかってやや土壌化の進んでいないシルト質土～砂質土になる(A・B層)。このシルト質土と、より東辺の第9～11層までの堆積の時間的關係はよくわからないが、A層については、その硬さからかなり古い堆積物と思われ、東辺の堆積層の基質を運んだ水流によって東部を徐々に浸食されたと解釈している。

南北の壁面からは、古環境に関するデータを得るために、各種の試料を採取している。北壁では、年代測定用の種実や大型植物遺体分析用の土壌をサンプリングしたほか、花粉分析用の柱状コアも採取している。南壁では、Y=2144辺りの標高43.8～43.9mで火山灰堆積が認められたため(Q・S層)、その試料採取とともに、その前後の堆積層も含めた花粉分析用の柱状コアも採取したほか、断ち割りを入れて、火山灰層の下位の堆積も、標高41.9mまでは確認している。(中世以前については来年度の年報で詳述する予定である。)

### 3 近世の遺構

第3層(黄灰色土)上面が近世の第1遺構面で、そこで検出した遺構を近世1とする。そして、第2遺構面の第4層(茶褐色土)上面で検出した、第3層を埋土とする遺構を、近世2とする。

(1) 近世1の遺構(図版11～16, 図40・44～46)

2基の木組を有する大溝1条と、3基の井戸を検出した(図版11上, 図40)。

南北大溝SD1 SD1は(図版12)、調査区西辺を南北にはしる大溝で、南接する京都市調査区でも検出されている。本調査区では、北辺と南辺を除く大半は、1972年の調査の際に掘削され既に埋め戻されていたが、北辺では、攪乱除去後に黄灰色土上面で検出できた。埋土は(図版13, 図44)、北辺でも南辺でも、上部に灰褐色土が堆積しており、包含遺物に明治期のものは認められない。北壁の層位によれば、黄灰色土の中部で基質がシルトなどの細粒分となっている部分(第3b層)がSD1からの氾濫を示していると判断できるので(図版13-3)、遅くとも黄灰色土の堆積中には存在していたことになる。埋土下部は、北辺でも南辺でも粘質土が主体となる。

この埋土下部の粘質土と埋土上部の灰褐色土の間の堆積は複雑で、基質がシルト～5mm程度の粗砂の薄層が互層になったり、土壌化していたりするが、いずれも面的に広くは展

開しない。南辺では、砂層はあまり認められず、あっても堆積は薄く粒径は3mm程度におさまる。北辺では、土を含まずに50mm台の礫も含む粗砂層の堆積する部分もあり、そうした粗砂や粒径が1mm程度の細砂でも明瞭なラミナを確認できる場合もあるので、水が勢いを変えながら流れてきたことがわかる。平面的には流向を確定できなかったが、地形および後述する木組遺構S X 2の構造から、S D 1は南流する水路だったといえる。

S D 1には、北辺には堰と思われる木組遺構S X 2が、南辺の西肩には土留めと思われる木組遺構S X 1が、それぞれあり、ともに1972年の調査区の外側に残存していた（図版12）。北辺の堆積では目立つ砂礫層が南辺でほとんど認められないのは、S X 2の作用によると思われる。S D 1は、少なくともS X 2以南では、通常は空堀と言える状況だったと判断する。なお、S D 1の遺物は、S X 2より南の1972年の京都市調査区までの残存部では、砂が目立つようになるまでの上層とそれ以下の2層に分けて回収したが、南辺では、砂層の堆積が不均質だったので埋土一括で回収した。

**木組遺構S X 2** S D 1内の調査区北壁際で検出した、木材で構築された堰のような取水施設（図版14・15、図45・46）。全体的に西側の遺存状態が悪いが、全体の規模は、幅4m、奥行き2mである。東西方向を軸とする横木や横板の南側に杭を打ち込んでいるので、北側が上流と判断できる。横木・横板を受ける杭は、上流側である北から順に5列ある。発掘調査後の立合調査で北壁の北側1m余りまで確認した際には、木材の構造物を確認できなかったため、木組は第1列より北には広がらない。

第1列のみ横板を有するが、その横板の下端は44.4mをはかる。横板を下流側で受ける杭は（W16～W14・W35A・W20～W23・W37A）ほとんどが上部を欠損しているが、最も東のW37Aの頭部で標高45.3mをはかるので、S X 2の残存高は、0.9mとなる。また、S D 1の両肩は、第1～3列までは東西に大きく拡幅されているとともに、第1～4列まででは土留め状の壁体をあてがわれている。

第1列の横板は、東側と西側で遺存状態に大きな違いがあるが、最下部には、両肩の第6層がテラス状に張り出した部分に橋を渡すように、杭状に先端が加工された丸太の横木（W18）が横位に置かれている（図版15-1）。それに接して下端を揃えるように、東側と西側それぞれに横板（W24下・W17）がある。西側の板（W17）は遺存状態も悪いが、どちらの横板もS D 1中央側の小口面は生きており、両者の間隔は40cm程度ある。

横板は、遺存状態の良い東側を見ると、W24下の上にW24上が載っている。どちらも厚さ3cm前後のニヨウマツの板材で、当初は幅60cm前後の一枚板と認識していた程に隙間が

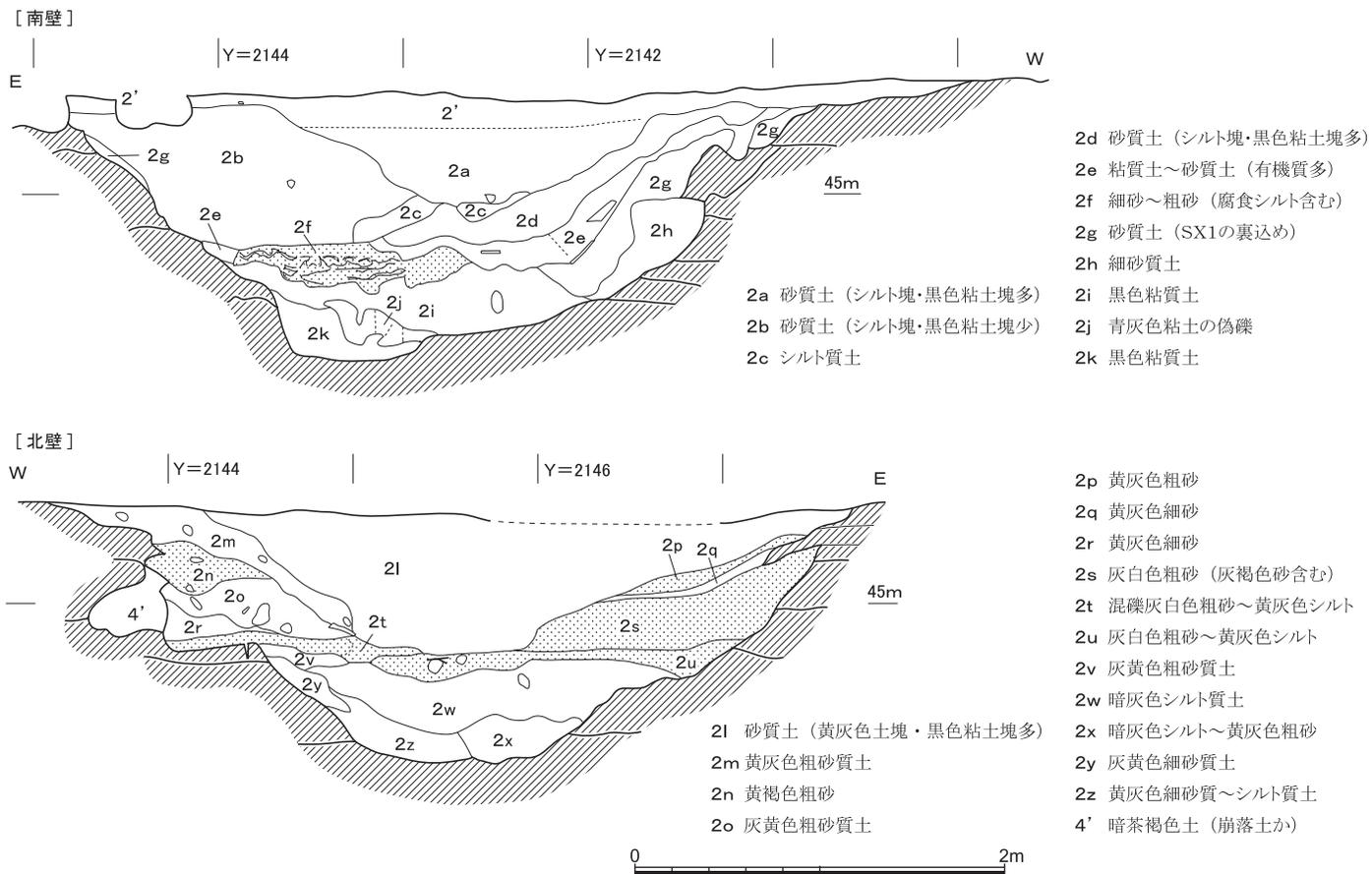


図44 大溝SD1の層位 縮尺1/40

全くない状態で載っていた。しかし、両者の継ぎ目に接着などの痕跡は確認できなかった。横板の上流側には、2段重ねで大径のスギの辺材（W25上・下）を宛がう（図版15-2）。この第1列の北側には、平坦面をもつ人頭大以上の礫が数点あり、横板に宛がった辺材や横木（W18）を上流側から押さえ込んでいたものと思われる。

西側ではW17の上位には構造材が認められないが、西側も同様の構造だったと仮定すると、東西の横板の間にある東西幅40cmの空隙は、水量調節用の水門だった可能性が高い。そうすると、その空隙部で丸太（W18）の数cm上位にあったスギの薄板（W19）は、水門の部材かもしれない。また、東端の上流側には、残存長80cm程の板材（W26）が、立てられた状態で出土している（図版15-3）。地盤のシルト層に差し込まれてはいないことからこの場で機能したとは考えがたく、水門部に上から差し込んで使う部材の一つが不使用時に置かれていたのかもしれない。

最上位の横板（W24上）の上端面は、小口面と同じく製材時のきれいな面が残るが、この板を下流側で受けていた杭（W21・22・23）はおおよそ直立しているものの、いずれもその数cm上位で折損しており、横板の西端の杭（W20）はそれより下位で折損している。また、西側の横板（W17）では、上縁が製材時の面をとどめているかは不明だが、それを受けた杭（W35A・W15）も、横板の上縁とおおよそ同じくらいの高さまでしか残っていない。

第2～5列までの下流側4列は、第3列を除き、1本の横木が渡るだけである。第3列には横木は認められずそれを支えた杭（W8・W9）のみが残るが、第2～5列は、おおよそ等間隔で平行しており、これら4列はいずれも、横木を受ける杭（W1・W2・W5・W6・W8・W9・W13）の頂部平坦面が標高44.7m台で揃っていて、横木を実質的に1本分しか受け止められない深さまで打ち込まれている（図版15-4）。SD1の両肩が窄まる第3～5列では、左右両肩のテラス状の平坦部に杭が穿たれるだけで中央には杭はないが、第2列では、横木（W11）を受ける杭は、東西の両端近くだけでなく（W12・W27）、中央にもある（W13）。なお、第2列と第1列の間は、西側がやや広がっている。

東肩と西肩には、上部が竹垣で下部が横板組みの土留め状の壁体が構築されている。遺存状態の良い東肩では、ニヨウマツの横板1枚（W30）の上に15本以上のタケを垣根状に積み重ね（W31）、それらを溝の立ち上がりラインに沿うように斜位に打ち込んだスギの丸太杭（W27～W29）で支えている。横板と竹垣は、北端ではラインが揃って第1列の横板（W24上）に接しているが、南端では、横板が支持杭（W29）より下流側に延びているのに対して竹垣はおおよそ支持杭の裏で終わっている。壁体の製作では、南側より北側に注

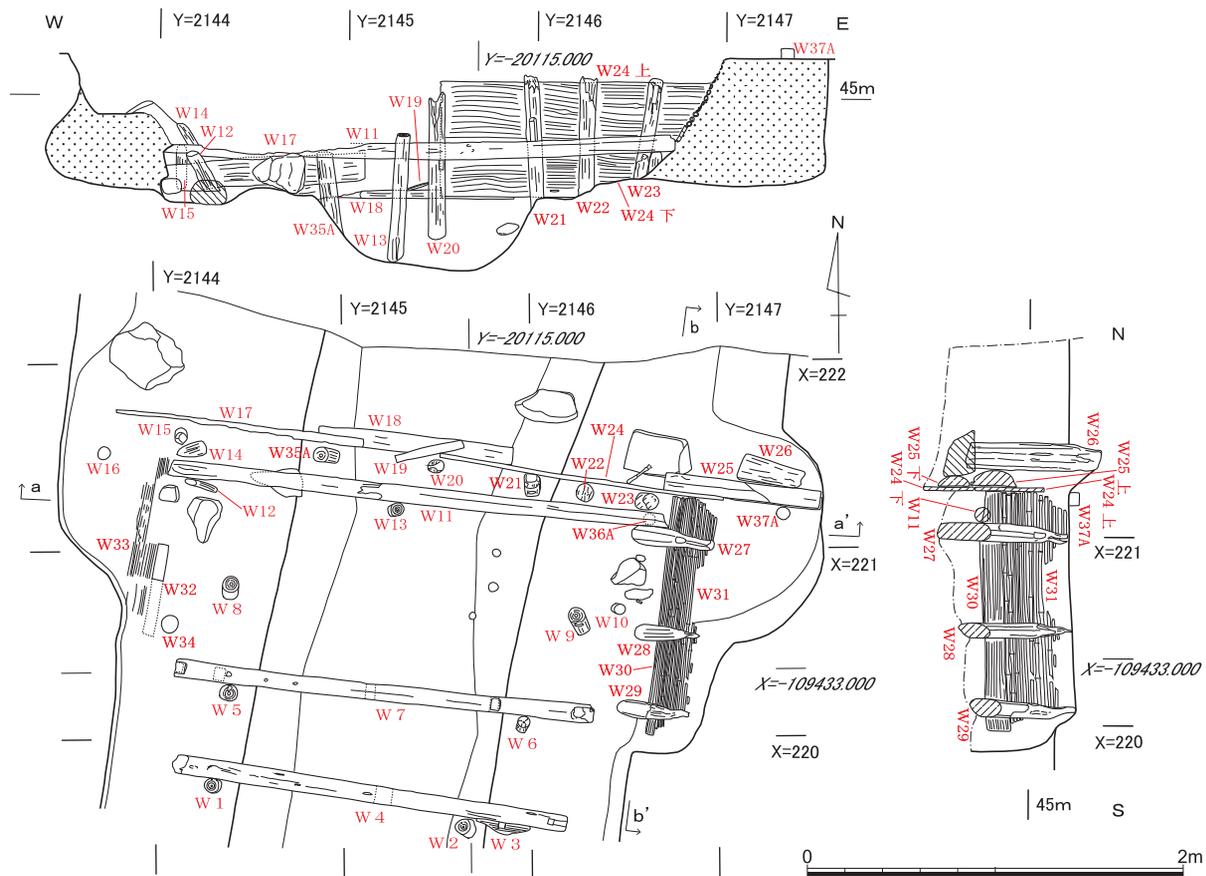


図45 木組遺構 S X 2 縮尺1/80

意がより払われていたと思われる。

西肩は、遺存状態が悪いが、壁面に横方向の繊維が見える有機質の残滓があり、下部は板状で (W32)、上部は竹管状だった (W33)。残存するのは、北端は第 2 列までで南端は第 4 列近くまでである。そのすぐ東には、縦方向の繊維が残る杭状の木質 (W34) を検出しているので、東肩と同様の土留め状構造で、配置も規模も東肩に対応すると思われる。

S X 2 では、第 3 列には杭 W 8・W 9 が受ける横木が存在しないことから、全 5 列が最終機能時点で同時に機能していたかは断言できないものの、上述の状況は、配置プランにも構築作業にも、全体的な計画性をうかがわせる。少なくとも当初は、両肩の壁体と合わせて 5 列一帯の木組として、堰の機能を想定して構築されたと考えたい。なお、木組全体では明確な補修痕跡は見いだしがたい。

構成材は、基本的に針葉樹で、杭にはスギやヒノキ、板にはスギとともにニヨウマツが用いられている。しかし、これらのうち、横木の W 4・W 7 は、体部にはぞ継ぎ穴などが残っており、とくに W 4 は釘で W 3 と結合されていたこともあって、建築物などに用いられた部材を転用したと判断できる (図版 15-5, 図 46)。杭の W 9・W 20・W 21・W 27 にも、ほぞの盲孔ないし穿孔があるので、横木と同様の部材を裁断して杭に転用したと思われる。また、横板に上流側から宛がわれた横木 (W 18) は、西側の先端が杭状に面取りされているが、杭として機能していないので、これも意図して施した加工ではなかったと判断できる。そのほか、杭 W 1・W 5 の頂部平坦面や W 4・W 7 の側面をはじめ、釘の打ち込み箇所があるが、S X 2 のなかで別の材と接続しているわけではなく、ここに持ち込まれる前に紙札などを留めていたかのようなものである。以上より、構造材のすべてないし多くは、S X 2 の構築を目的に伐採・製材されたものではない転用材と判断している。

S X 2 の内部の堆積は複雑だが、およそ、上部に灰褐色土、その下の中位には粗砂を主体とするシルト～砂の層がある。埋土の掘削では、この中位の砂層およびその上下の 3 層に分けて遺物を回収した。また、東西の肩部で構築材のあるところでは裏込めの遺物も分離して回収している。下部の堆積は、西辺では、北壁から第 4 列辺りまでは 50mm 台の礫も含む砂礫層が主体だが (図版 14-1, 15-1・6)、第 5 列になると礫径は小さくなり上方薄層化し、S D 1 全体の下部と同じく黒みがかった粘質土が主体となって、わずかに粗砂層を介在する程度になる (図版 16-1)。東辺は、西辺ほどの粒径や層厚ではないものの、上流ほど粘質土よりも砂質層が目立ち、下流に向かっての傾向も西辺と同様で、第 5 列ではほとんどが粘質土の堆積である。また、第 2 列南側の中央付近の底面は、下位の堆積の

近世の遺構

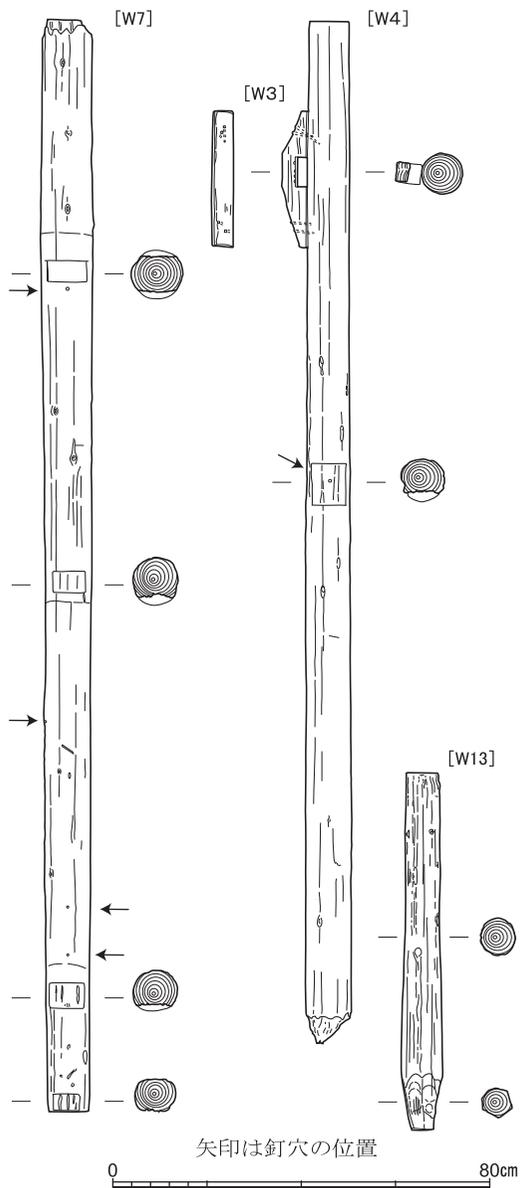


図46 木組遺構 S X 2 の構造材 縮尺1/16

黄白色砂層（第11層）と判別できない深さまで滝壺状に粗砂を含んで埋積していた（図版16-2）。

こうした堆積状況も踏まえると、SX2は、テラス状の平坦面が本来の底面だった大溝SD1に、必要に応じて粒径10mm程度の砂を流せる程度までの強さの水が北方からSD1に引き込まれるときの、堰として機能するべく構築されたと判断する。導水は、ここで深さ約1mのダム湖状態まで溜まった後で少なくとも左岸（＝東側）に溢流して、一帯に黄灰色土の中層の堆積をもたらせたこともあった。細粒分を堆積させる田畑の滋養に供したこともあったのだろう。機能した期間は不明だが、最終的には、50mm台の礫をもたらす強い水流によって、西半が損壊し、西肩も大きく破損・劣化して（図版13-4、14-1）、堰としては機能不全になったと思われる。この損壊は、第1列の横木（W18）の西端があたかも砂礫層に挟まれているかのような堆積状況が示すように（図版15-1）、SD1の本来の基底部の特に西側が洗掘されて、横板（W17）より下位にトンネル状の隙間ができて、水の流れが西側に集中したことが大きく影響したと思われる。堰の西側に水が進んだろうことは、第1列と第2列の隙間が西側ほど広がっていることからもうかがえる。

年代については、包含遺物では、上位堆積層には明治期の遺物は認められないが、下位堆積層からは端反りの染付の椀（II52）が出土している。したがって、19世紀中頃までは機能していて明治までには埋没した遺構と判断している。構築年代は、層位的には上部では第3a層（黄灰色土）を切り込む一方で中位の埋土層は第3b層連なる部分があることと、裏込めから出土した遺物に関する限りでは、18世紀にさかのぼりえる。

**木組遺構SX1** SD1西肩に構築された土留めと思われる板組で（図版16-3）、調査区南壁際で検出した。南端は調査区外へと続いているが、確認できた部分では幅2.6mをはかる。スギやヒノキなど針葉樹の丸太を縦に半裁した杭を、60cmほどの間隔で地盤のシルト層に深く打ち込んで、裁断面側でスギやニヨウマツの横板を支えている。横板は、下の段に上の段が重なっており、南壁際では3段目まで確認できるが、遺存状態が良いのは下から2段目までで、SX2のようにそれより上位に竹垣があったかは不明である。最下段の板の下端から最上部の板材の残存部上縁までの高さは0.4mをはかる。対岸の東肩には同様の構築物は認められない。横板の継ぎ目が北から4本目の杭の裏側にあり、南側の板が北側の板の上に4cm程度被さっているのを確認できたので、（図版16-4）下流側が上に乗っていることになる。したがって、SX1は、水流があることを想定した木組とは思いがたい。

## 近世の遺物

S X 1 の構築年代は、層位的には黄灰色土の堆積中ないしそれ以後である。板組の下部で板組に近接して近世の陶器や瓦が出土したが、いずれも細片で時期を限定できなかった。また、裏込めから出土した遺物は、中世の土師器や瓦の破片などで、近世のものは見られなかった。

井戸 S E 1・8・10 北壁際中央の S E 1 は（図版16-5）、井筒が、上部は漆喰、下部はニヨウマツなどの15枚の板材を縦に組んだ木桶で構成される。検出面の標高は45.1mだが、底面標高は確認できなかった。調査区中央の S E 8 は（図版16-6）、1972年の調査区内にあり、井筒の下部は S E 1 と同様の構造で、残存する最下段の縦板は13枚。その上にもう一段の縦板組みがあるが、途中で削平されている。井筒上部の漆喰の下端がわずかに残存する。底面の標高は43.1m。東南辺の S E 10 は、桶の木枠の痕跡をできた。漆喰を用いていないので、S E 1・8 に先行するのかもしれない。底面の標高は43.8m。

### (2) 近世2の遺構

2基の土坑と、南北・東西方向の小溝群を検出した（図版11下、図40）。西北隅の S E 2 は隅丸方形の土坑で、底面標高は44.3m。野壺だろうか。中央南壁際で検出した S E 3 も野壺と思われる円形土坑。底面標高は43.6m。わずかに東に振れる方位をもって調査区全面に広がる小溝群は、磁器や砥石などを包含していたが（II114～II117）、ほとんどが細片で出土量も少なく、いずれも散在していた。耕作に関わる溝と判断する。

## 4 近世の遺物

コンテナ17箱分の遺物が出土した。近世1の遺構出土の遺物、近世2の遺構出土遺物、包含層などから出土した近世遺物、の順に説明する（図47～56）。

SD 1 出土遺物（II 1～II 32） II 1 は、土師器小皿で器壁が摩滅している。II 2～II 10 は陶器で、II 2・II 3 は京・信楽系の椀。II 3 の外面は、鉄釉の施文後に釉をかけていない。II 4 は高台に切り込みの入る巴高台の京・信楽系の小杯。II 5・II 6 は土瓶の蓋で、II 5 の内面は煤の付着が著しい。II 6 は白化粧に緑釉・鉄釉で上絵をつける。II 7 は京・信楽系の徳利で、焼け歪んでいる。II 8 は播り鉢。II 9・II 10 は京・信楽系で、前者は仏飯で後者は灯明皿。II 11～II 18 は磁器で、II 11～II 17 は椀。II 11 はくらわんかで、II 12～II 14 は広東椀。II 15 には上絵があり、文様を描かない II 16 の底裏の墨書は「阪」か。II 17 は筒形。II 18 は大鉢の底部で、蛇の目凹形高台。

II 19 は埴塼で、外面には、溶銅を流すために本体をユトリハシで挟み上げるときの引っ

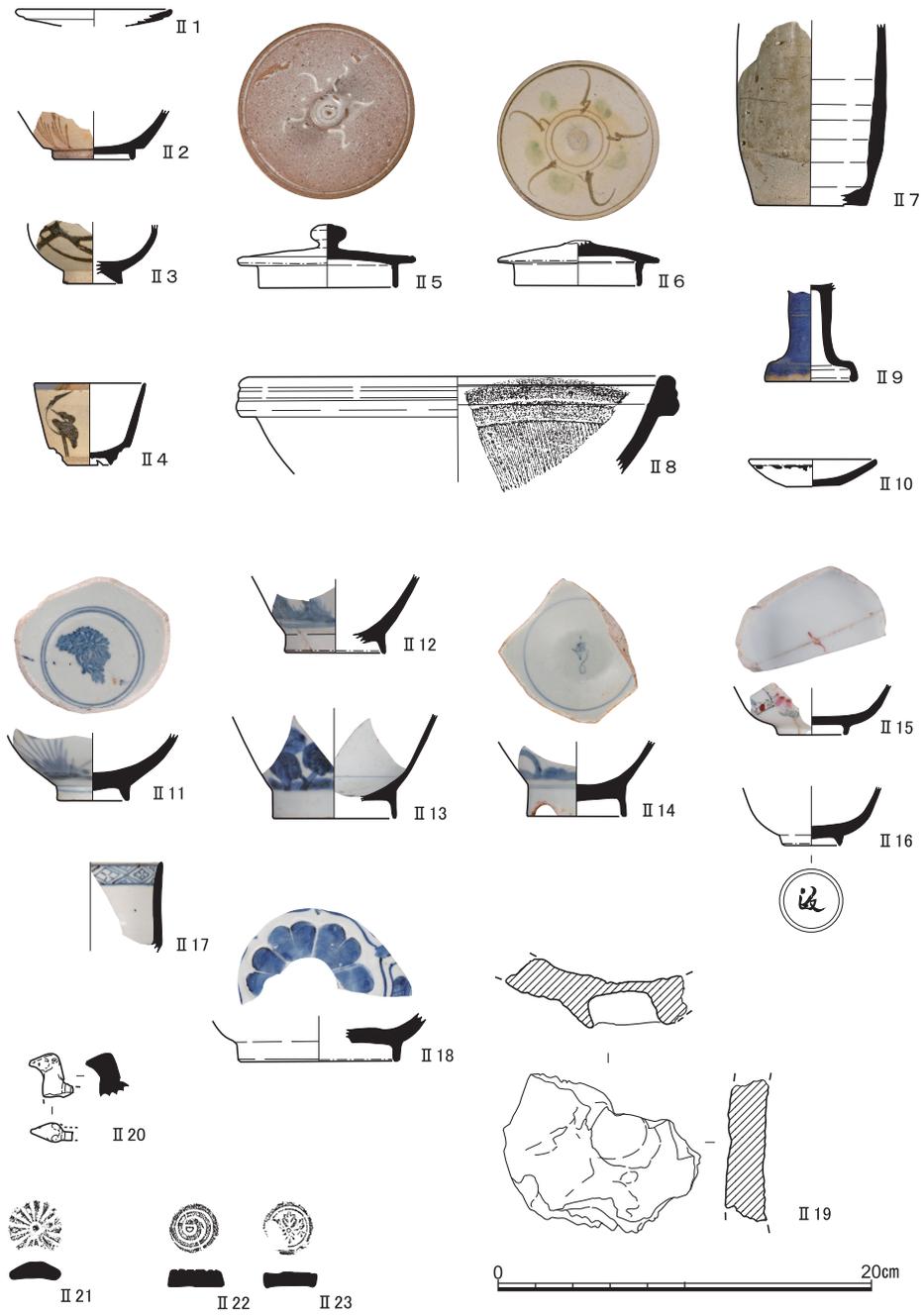


図47 SD 1 出土遺物(1) (II 1 土師器, II 2 ~ II 10 陶器, II 11 ~ II 18 磁器, II 19 埴塼, II 20 ~ II 23 土製品)

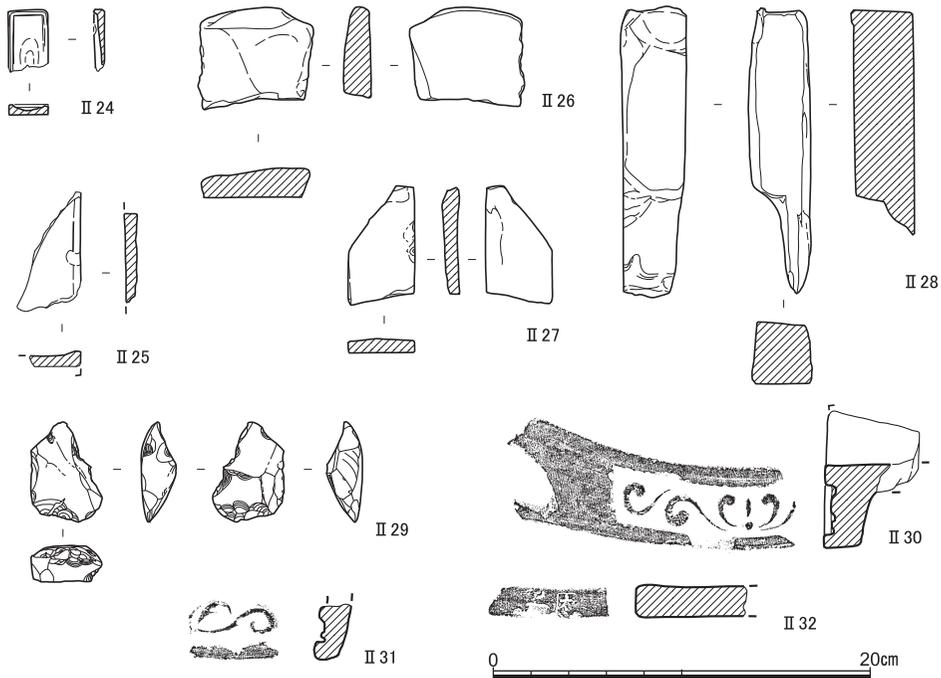


図48 S D 1 出土遺物(2) (II 24～II 29石製品, II 30～II 32瓦)

かり用の凹みがある。II 20・II 21は土製の玩具で、II 22・II 23は泥メンコ。II 24・II 25は硯。II 26～II 28は砥石。II 27・II 28は泥岩ないし粘板岩で、II 26は凝灰岩か。II 29は緑色チャート製の火打ち石。II 30は軒棧瓦。II 31・II 32は平瓦ないし棧瓦で、前者は瓦当の一部で後者は端面に刻印を有する。

S X 2 出土遺物 (II 33～II 89) II 33～II 48は陶器で、II 33～II 35は椀。高台の大半を失っているII 33の小椀には、草花文の上絵がある。II 34は、胴下半が四方に尖る内外施釉の小椀で、色調は外面が灰色で口端および内面が白色を呈する。京・信楽系と思われるII 35の底裏には、「錦□□」の刻印がある。幕末の錦頂山か〔加藤編1972〕。II 36は淡桃色を呈する信楽の洗で、外面にも底部を除いて釉がかかる。II 37は軟質施釉陶器の手塩皿で、見込みは草花文か。II 38は内外面施釉の徳利で、焼きが甘いので軟質施釉陶器に似る。飛び鉋に鉄釉のII 39は鍋。II 40は外面施釉の急須蓋。内面に四角囲みで「寶山」の刻印があるが、何代目かはわからない。II 41～II 43は播り鉢。II 44は、信楽の灯明皿で、口縁内外面ともに煤が付着する。II 45は信楽の灯明受け皿。II 46は信楽と思われる鉄釉の灯火具。II 47・II 48は焼き締め陶器で、ともに植木鉢か。

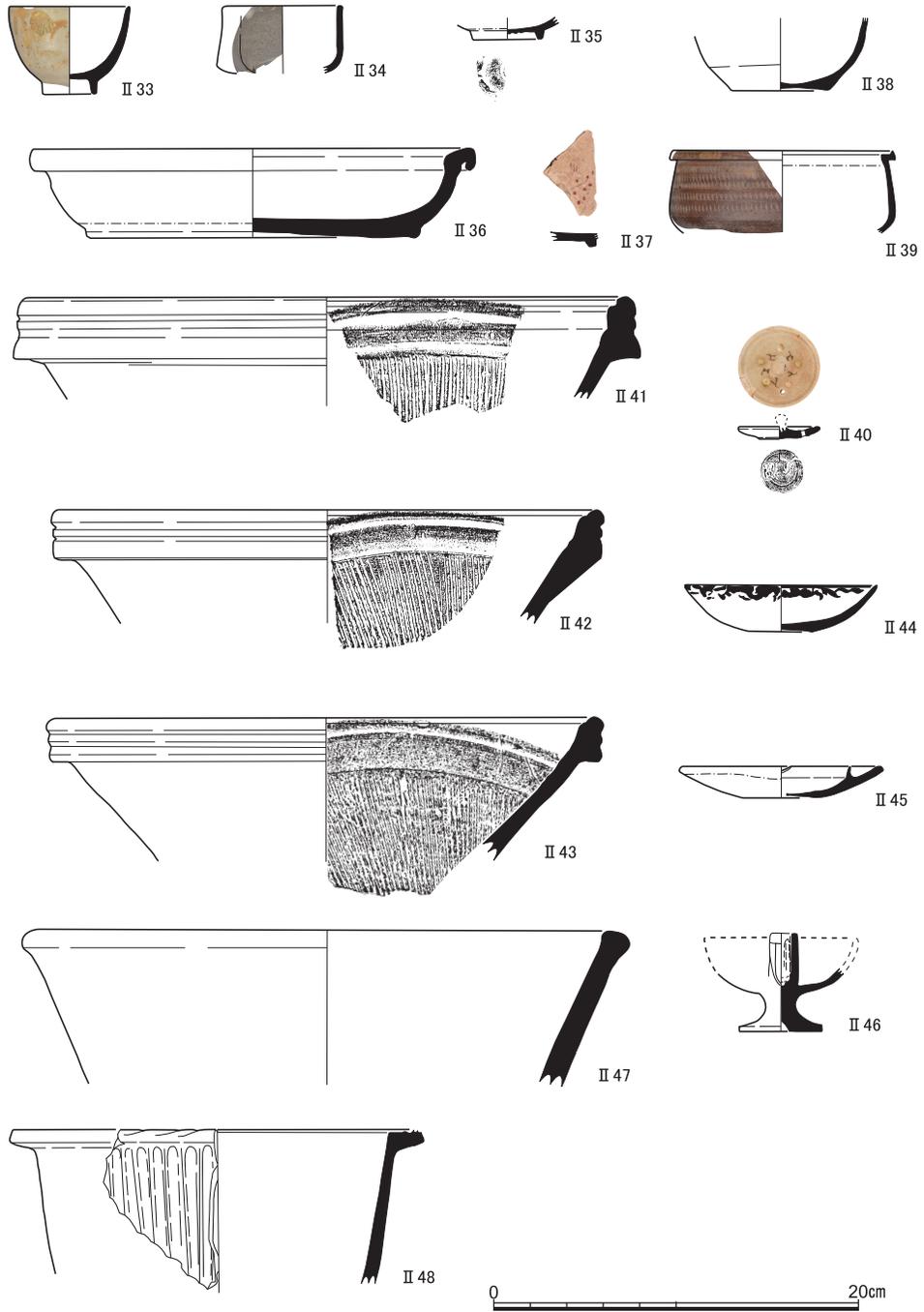


図49 S X 2 出土遺物(1) (II 33~ II 48陶器)

Ⅱ49～Ⅱ61は磁器。Ⅱ49～Ⅱ56は椀で、Ⅱ51・Ⅱ52は端反り。Ⅱ55は絵付けのない小杯で、Ⅱ56は筒形。Ⅱ57～Ⅱ60は蓋。Ⅱ61の鉢は、外面が型押しによると思われる草花文で、見込みは呉須による絵付け。Ⅱ62・Ⅱ63は窯道具で、前者がピンで後者が輪トチン。Ⅱ64は、上面および側面上半が著しく被熱しており、焼き台と思われる。Ⅱ65～Ⅱ69は柑塙。Ⅱ65は底部近くで割れている。Ⅱ66は底部近くと思われる。Ⅱ67は栓のような形状だが、軸部にもガラス化している部分が認められる。Ⅱ68・Ⅱ69はドーナツ状で、測縁が弧を描き中央は穿孔。穿孔部の表面もよく被熱している。Ⅱ67の軸部とは径が異なるが、栓を受けるための孔だったと思われる。

Ⅱ70～Ⅱ81は土製の玩具類。Ⅱ71は頂部の穿孔部内面にも緑釉がかかる。Ⅱ72は人形の台座だろう。Ⅱ76は残存部に「文銀」とある。Ⅱ82・Ⅱ83は砥石。Ⅱ84は緑色チャート製の

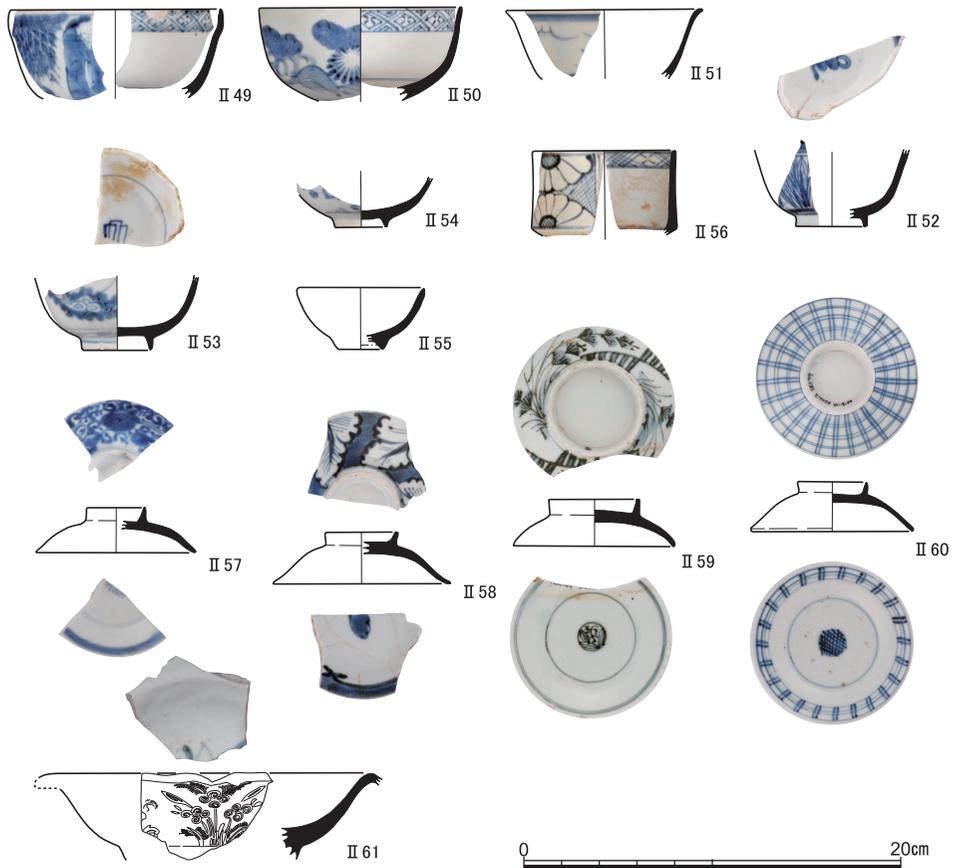


図50 S X 2 出土遺物(2) (Ⅱ49～Ⅱ61磁器)

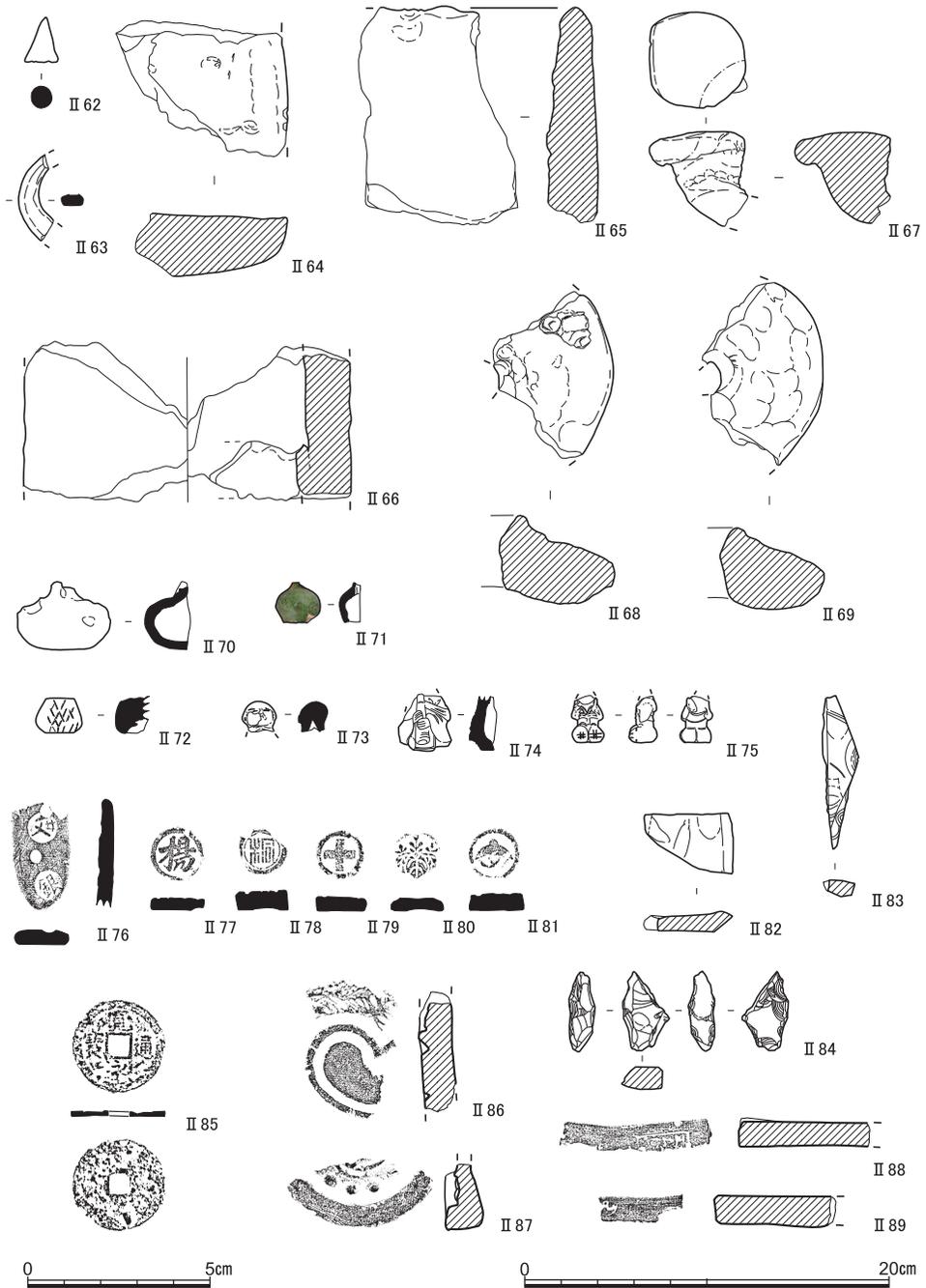


図51 S X 2 出土遺物(3) (II 62~II 64窯道具, II 65~II 69埴塼, II 70~II 81土製品, II 82~II 84石製品, II 85錢貨, II 86~II 89瓦) II 85のみ縮尺1/2

の火打ち石でⅡ85は寛永通宝。Ⅱ86～Ⅱ89は瓦で、棟端瓦のⅡ86は雲形の鬼瓦の右辺近くだろう。Ⅱ87は大棟を飾る小菊か。Ⅱ88・Ⅱ89は軒先側の端面に刻印をもつ平瓦ないし棧瓦。ともに判読が難しいが、Ⅱ88は四角囲みで左行には4字あり、Ⅱ89には丸囲みに「瓦」とも読める文字ないし記号がある。

S X 2には、上部に灰褐色土、その下に粗砂を主体とするシルト～砂の層があり、それより下位は黒みがかった粘質土が堆積していたので、埋土の掘削では、中位の砂層およびその上下の3層に分けて遺物を回収した。また、東西の肩部で構築材のあるところでは、裏込めの遺物も分離して回収している。Ⅱ46・Ⅱ61・Ⅱ74・Ⅱ76・Ⅱ89は裏込め出土で、Ⅱ40・Ⅱ52・Ⅱ58は下層出土、Ⅱ34・Ⅱ37・Ⅱ54は上層出土で、そのほかはいずれも中層から出土している。

**S E 1 出土遺物** (Ⅱ90～Ⅱ108) Ⅱ90～Ⅱ101は陶器。Ⅱ90は、高台の内側が挿り鉢状に凹む小杯で、外面にコバルト釉で描かれた文字は「枝」と読める。Ⅱ91の小杯はⅡ92の椀と同じく京・信楽系。Ⅱ93は大鉢。Ⅱ94は京・信楽系の鉢で、無釉の底裏の墨書は「井力」か。京・信楽系のⅡ95は、碁笥底状の内外施釉で、片口と思われる。Ⅱ96は、外面と口縁内面が無釉の土瓶。Ⅱ97は明褐色を呈する無釉の急須。Ⅱ98は土瓶の蓋で、京・信楽系だろう。Ⅱ99は内外施釉で褐色を呈する甕で、肩部におそらく2個一対になる把手がつく。Ⅱ100は、蓋受け部以外は内外面にしっかりと施釉された白色無文の香炉で、3単位になるとと思われる獣脚をもつ。京・信楽系か。底裏に「大改良／丁丑<sup>[未カ]</sup>□／□」の墨書があるⅡ101の大甕は、破片が、井筒の中からも出土しているが、大半はⅡ97・Ⅱ99と同じく井筒より上部の埋土から出土した。丁丑は明治10年(1877)だろう。

Ⅱ102は瓦質土器と思われるが、焼成により黒化した土師器の可能性もある。内面に1単位の櫛歯文が見られ、また、口縁付近を中心に煤が付着している。Ⅱ103は内面施釉で白色を呈する型押し成形の紅皿。Ⅱ104は輪トチンだろう。Ⅱ105は外面下半に墨で彩色された土製の玩具。Ⅱ106・Ⅱ107は軒平瓦ないし軒棧瓦。Ⅱ106は井筒より上部の埋土から出土している。Ⅱ108は軒丸瓦で降り棟用か。

**S E 8 出土遺物** Ⅱ109は赤絵の陶器皿。

**S E 10 出土遺物** (Ⅱ110～Ⅱ112) Ⅱ110・Ⅱ111陶器。前者は信楽の灯明受け皿で、後者は内外に鉄釉のかかる通徳利。Ⅱ112は軒平瓦ないし軒棧瓦。

**S E 3 出土遺物** Ⅱ113は土師器小皿で器壁がやや摩滅している。

**小溝群 (S D 3・30・22・23) 出土遺物** (Ⅱ114～Ⅱ117) Ⅱ114・Ⅱ115は磁器染付

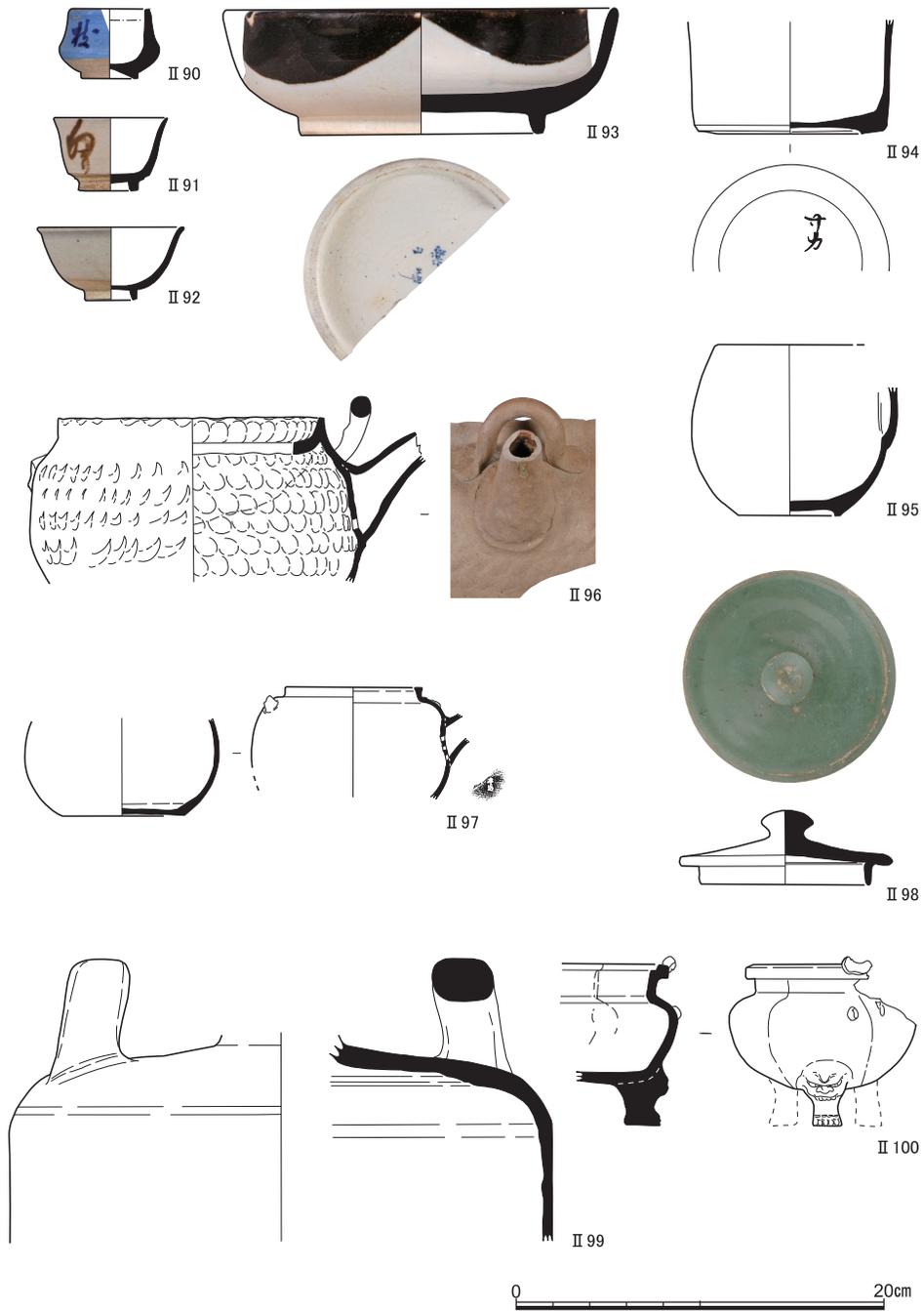


図52 S E 1 出土遺物(1) (II 90~II 100陶器)

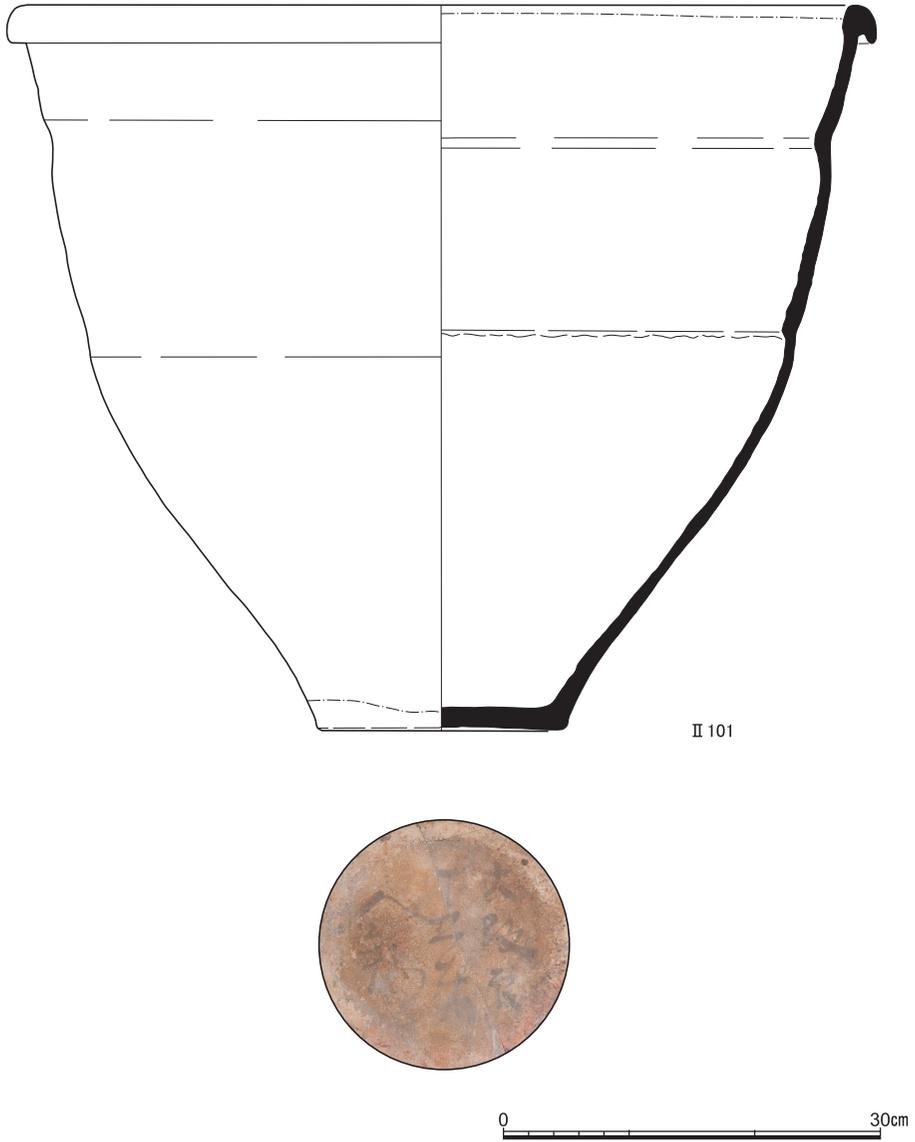


図53 S E 1 出土遺物(2) (II 101陶器) 縮尺1/6



図54 S E 1 出土遺物(3) (II 102瓦器, II 103磁器, II 104窯道具, II 105土製品, II 106~II 108瓦), S E 8 出土遺物 (II 109陶器), S E 10 出土遺物 (II 110・II 111陶器, II 112瓦), S E 3 出土遺物 (II 113土師器), S D 3 出土遺物 (II 114磁器), S D 30 出土遺物 (II 115磁器), S D 22 出土遺物 (II 116石製品), S D 23 出土遺物 (II 117石製品)

## 近世の遺物

の椀。Ⅱ116・Ⅱ117は砥石。Ⅱ114はS D 3から、Ⅱ115はS D30から、Ⅱ116はS D22から、Ⅱ117はS D23から、それぞれ出土した。

以下、表土・攪乱や近世遺物包含層から出土した近世遺物、そしてそれらの層の直下に堆積していた中世以前の遺構や遺物包含層の上面清掃時に出土した近世遺物を記す。

**黄灰色土出土遺物（Ⅱ118～Ⅱ126）** Ⅱ118～Ⅱ121は土師器で、Ⅱ118はひな皿で、Ⅱ119は端部をつまみ上げ、Ⅱ120は圏線をもち、いずれも近世。Ⅱ121は中世末期。Ⅱ122は磁器染付の皿。Ⅱ123～Ⅱ126は泥面子。黄灰色土からは、明らかに幕末と思われる遺物は確認できず、18世紀までの堆積と思われる。

**中世以前の層位の上面出土遺物（Ⅱ127～Ⅱ142）** Ⅱ127～Ⅱ129は土師器で、Ⅱ127は1段撫で素縁手法で14世紀、見込みに圏線をもつ近世のⅡ128は、口縁に煤が附着しており、灯明に供したことがわかる。Ⅱ129は近世の五徳の足。Ⅱ130は瓦器。環状で、内側には滑り止めの効果を狙ってかカキメが施されている。内面には被熱で黒化した部分があるので、焔炉のような用途があったのだろうか。Ⅱ131・Ⅱ132は陶器椀の底部。Ⅱ131は見込みに渦状のケズリを施している。Ⅱ133・Ⅱ134は磁器染付の小杯と皿。焼継ぎされているⅡ134は、底裏には釉下に朱書きもある。高台は残存部分では円弧を描くが、見込みの意匠に照らせば、角皿なのかもしれない。Ⅱ135は白磁のキセル吸い口。Ⅱ136は埴塙の破片。Ⅱ137は近代の煉瓦だが刻印があるので掲載した。Ⅱ138・Ⅱ139は寛永通宝。Ⅱ140～Ⅱ142は泥岩ないし粘板岩の砥石。Ⅱ141は黄色味が強く、鳴滝産か。

**表土・攪乱の出土遺物（Ⅱ143～Ⅱ159）** いずれも近世と思われるものを掲載した。Ⅱ143～Ⅱ147は陶器で、皿の底部のⅡ143・Ⅱ144は見込みに、前者は鉄釉で「栄」、後者は呉須で「大佛」と書かれる。Ⅱ145は段重の底部と思われ、無釉の底裏に書かれた墨書は「材」か。焼締め陶器のⅡ146は土瓶の蓋。Ⅱ147は大型厚手で、底部に焼成前の穿孔があるので、植木鉢と思われる。Ⅱ148は磁器染付の椀で、高台内面に「因／イン」と朱書きがある。Ⅱ149は、ウィローパターン〔岡1984〕を呈する欧州陶器の皿。Ⅱ150は黒色を呈するガラス製のビール瓶ないしワインボトルの底部。Ⅱ151は埴塙の底面か。側面がガラス化している。土製のⅡ152は、俯瞰が円形となり外面に菊花状の文様をもつ容器の型。Ⅱ153は芥子面。Ⅱ154は泥面子。Ⅱ155は軒平瓦で、Ⅱ156は凸面に「三州／二四九」の刻印がある平瓦で、Ⅱ157は隅巴瓦。Ⅱ158・Ⅱ159は黒灰色を呈する粘板岩の砥石。

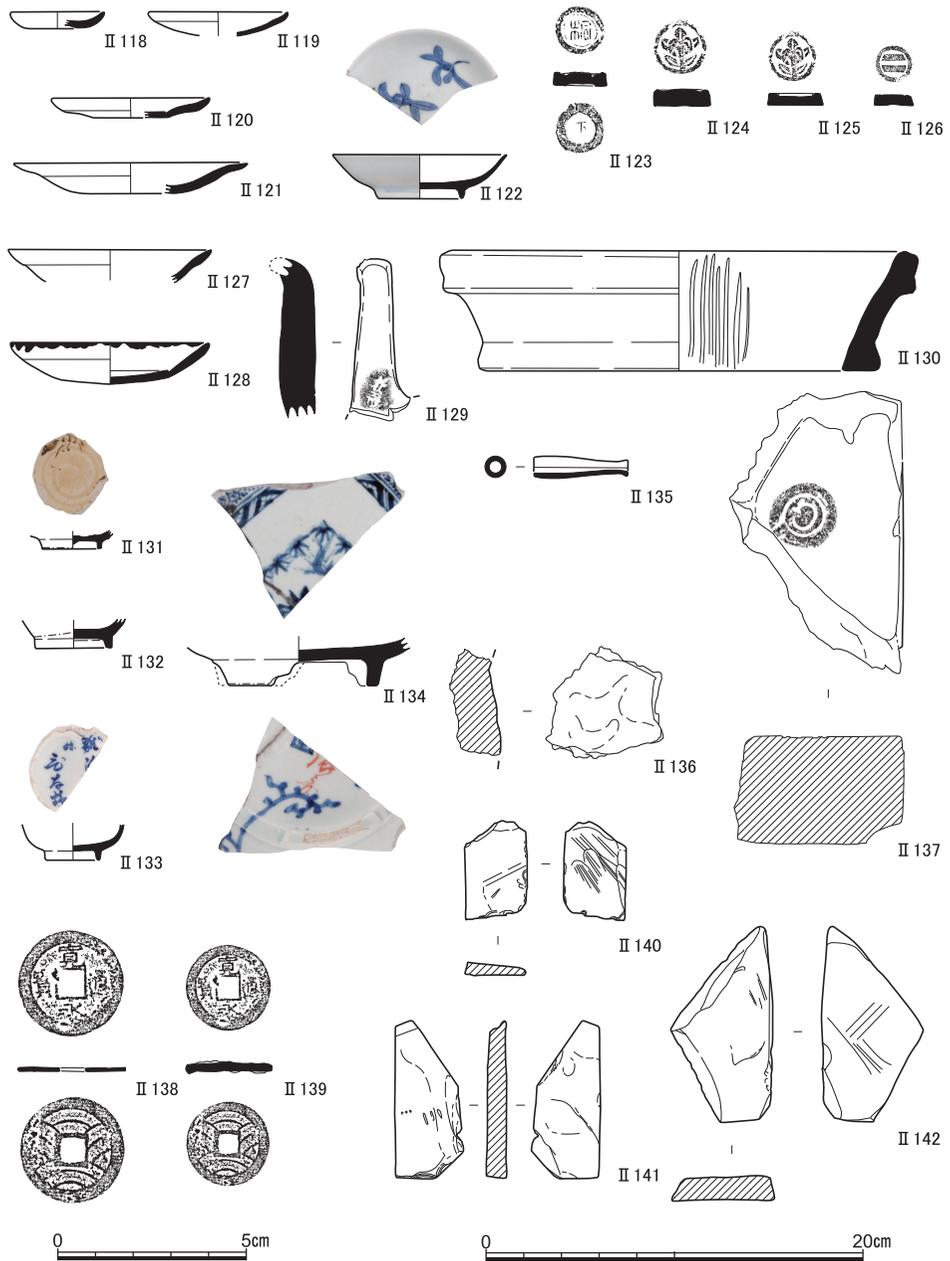


図55 黄灰色土出土遺物（II 118～II 121土師器，II 122磁器，II 123～II 126土製品）中世以前の包含層上面・遺構上面出土の近世遺物（II 127～II 129土師器，II 130瓦器，II 131・II 132陶器，II 133～II 135磁器，II 136埴塼，II 137煉瓦，II 138・II 139錢貨，II 140～II 142石製品）  
II 138・II 139のみ縮尺1/2

近世の遺物

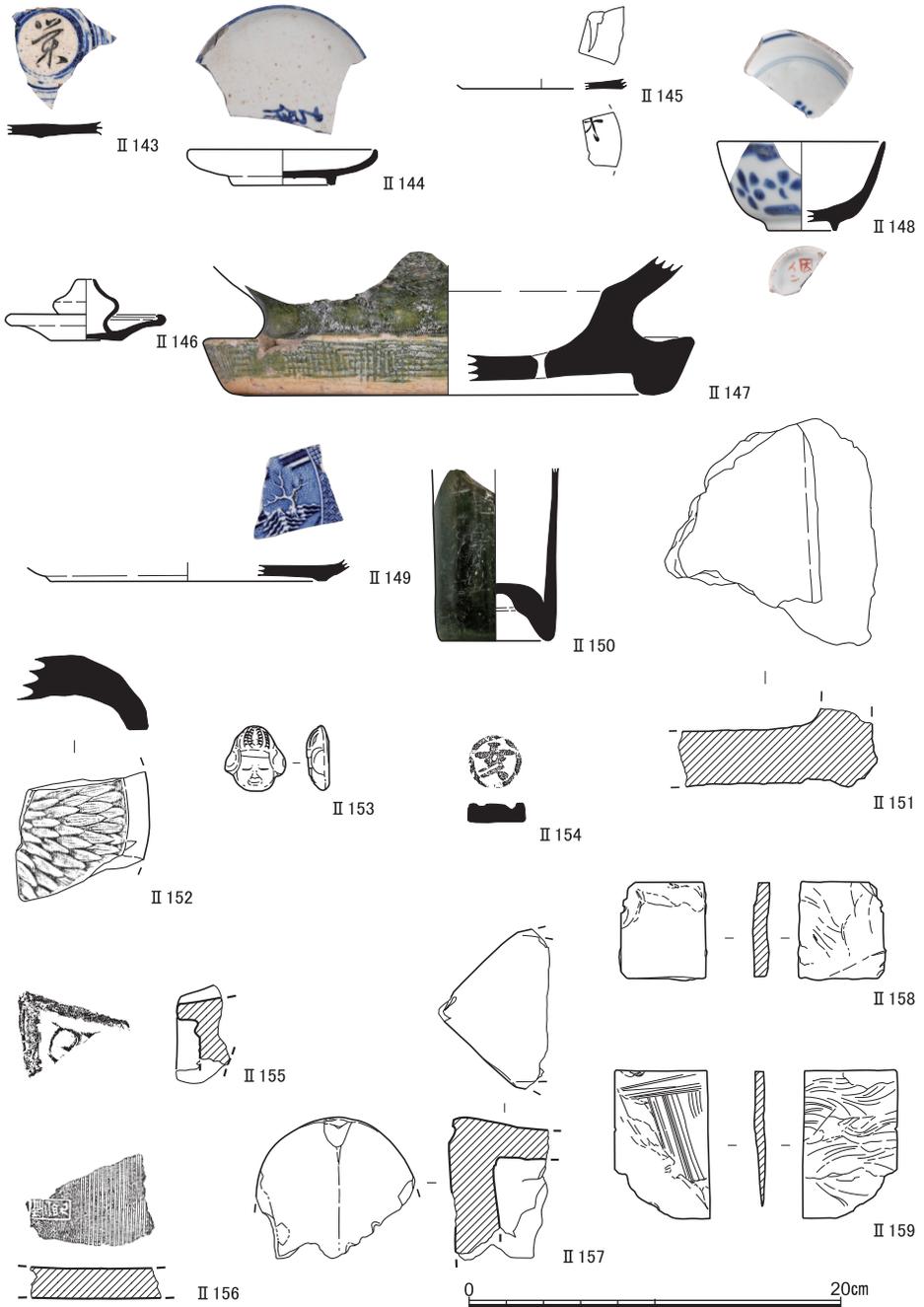


図56 表土・攪乱の出土遺物（II143～II147陶器，II148磁器，II149西洋陶器，II150ガラス製品，II151埴塼，II152～II154土製品，II155～II157瓦，II158・II159石製品）

## 5 小 結

今回の近世における調査成果に主としてとづきながら、調査地の歴史の変遷を簡潔にたどり、まとめに代えることにしたい。

**調査地の履歴** 最初に、調査地点が所属する行政区画の近世以降の履歴を確認してみると、幾つかの画期が指摘できる。愛宕郡岡崎村であった調査地一帯は、江戸時代前半にはわずかな寺院の所在のほかは田畑のひろがる農村であったが、宝永五年（1708）の大火で禁裏・仙洞御所をはじめとする広大な範囲が焼失した際、復興の市街整備のために禁裏周辺の寺院と町家の移転先となることで、大きく変化した。調査地西側に現在も軒を並べる妙伝寺をはじめとした寺院群までがその範囲であり、京の町組に属する拡張した市街地が形成されたのである。この時点で、調査地点は岡崎村の西縁となり、現在は新洞学区と呼称されている新市街地と境を接する位置となった（図57上段）。

その後も、岡崎村の側はしばらく近郊農村として推移するが、幕末のごく一時期、おおむね1860年代において、上洛する諸藩が藩士の駐屯地として藩邸敷地を求めたため、景観は激変を遂げることになる。その状況の一端は幕末期の絵図に顕著に示されることである（図57下段左）。調査地点は、広大な敷地を占める加賀藩邸の西端付近となっていたことがわかるが、その期間は長く続かず、維新後に撤去された藩邸敷地は再び耕地となり、明治期前半には再び農村へと回帰していることがわかる（同右）。そして明治23年（1890）以降、現在は調査地点の東側を北流している琵琶湖疎水の建設を契機に、近代都市京都の一角として、土地利用は大きく変貌していくことになる。

**南北大溝の性格** 調査区西辺を南北に走る南北大溝 S D 1 については、1972年の報告では、東側の古川町通りと並行してはしることから、その側溝との推測がされている。しかしながら、3 m 近い規模があること、S X 1・S X 2 とした木製構造物の存在などを考慮すると、側溝以上の機能を担う重要な遺構の可能性を考えておく必要がある。

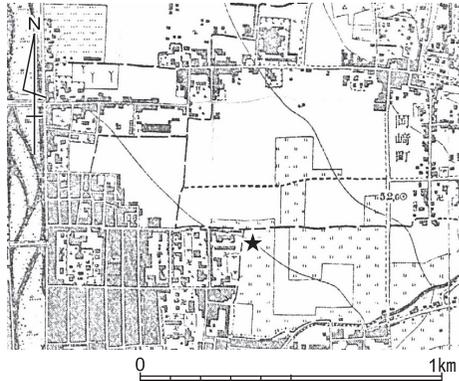
そこで、上記した履歴を考慮しながら、埋積状況もふまえて南北大溝 S D 1 を性格づけると、1708年の宝永大火を契機とした市街化により、岡崎村西限の境界溝として整備されたものと考えるのがふさわしい、という結論に至る。先行する溝や流路の存在は不詳であるが、近世遺物を包含する耕作土の黄灰色土層（第3層）と、その下の近世面2で検出された黄灰色土を埋土とする耕作溝群を切っていることは、近世段階のなかで手を加えられたとみる想定と整合的であろう。溝内の埋積については第3節で詳報したところであるが、



『京都明細大絵図』正徳4年(1714)~享保6年(1721)頃



『改正京町御絵図細見大成』慶応4年(1868)刊



陸地測量部発行仮製地形図「京都」  
 明治22年(1889)測量25年(1892)製版  
 \*縮尺1/20000を1/25000に縮小

図57 近世～近代における調査地点周辺 (★が調査地点比定地)

複数回の埋積を繰り返す中で、東側への溢水氾濫と復旧が黄灰色土中に認識されるなど、溝には豊富な流量があり、長期にわたり水路としても整備され機能していた様子がかがわれる。溝の護岸が市街地となる西岸側に重点的に確認されることも、矛盾しないといえる。

**幕末期の状況** その後の加賀藩邸となる期間は、実質的には設置が了解された慶応三年（1867）から翌年にかけての2年間程度とみられる〔宮下2006〕。金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の清水文庫に残される岡崎屋敷の図（特18.6-26『京都新御屋敷絵図』（慶応二年三月））には、幅2間と表記される堀がめぐるように描かれている。仮にこの通り施工されたとすれば、南北大溝SD1は、そのまま藩邸の堀として転用されたのであろう。

加賀藩岡崎屋敷にかかわる堀の遺構としては、調査地から250m東方の京都市美術館（当時）敷地内において東西方向の堀27が44mにわたり検出され、北側の二条通とを区画する外堀として報告されている〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2015〕。断面逆台形の形状、幅3m深さ2m程度の規模、出土遺物が少量であることから短期間での埋め戻しと推定、という属性は、規模を除くと今回のSD1と異なる部分が多い。ただし、「堀の南壁は、板材や割竹と丸杭を用いて護岸している」と報告されているものが、今回のSX2東壁の護岸（図版14-3）と同種であるならば、堀のための造作としての共通性を有する遺構として認定できる可能性はあろう。

しかしながら、宝永大火後の鴨東の二条通南側には、新市街地へ白川から導水するための東西水路が設けられており（図57上段）、加賀藩邸建設時そのまま機能していた可能性が高い。この水路が基幹的で重要なものであったことは、明治24年（1891）において、疎水開削の結果断ち切られた白川水源の水路の代替として、疎水からの導水が請願され許可されるという出来事からもうかがうことができる〔松本2013〕。そこからの分流となるSD1よりも、重要性ゆえに底ざらえなどが徹底されていたとすれば、遺物が稀少であることも理解可能であろう。したがって、近世二条通の路面が確認されていない現状では決定しがたいものの、藩邸北側の堀についても、SD1と同様に、既設水路が転用された可能性をここでは指摘しておきたい。

**近代の展開** SD1の上半は一気に埋め戻されており、その上面を第2層の灰褐色土が覆っている。藩邸の廃絶後からさほど時を経ず整地され、耕地に戻る過程を反映する堆積状況といえよう。明治23年（1890）の疎水建設前の状態を示す地図では、調査地一帯に水田としての土地利用が示されており（図57下段右側）、灰褐色土は、こうした明治前半

期の短期間の耕作土であろう。さらにその上面に厚く堆積する表土層は、東から西へと縞状に積み重ねられており、調査地の東側に疎水が開削された際、その掘削土を低平な西側へと盛って整地した様子がうかがわれる。

上部に漆喰、下部に堅固な桶を井筒に用いた近世の井戸SE1・8は、藩邸期かそれ以後に設けられたとみられ、SD1が埋没した後も機能していた可能性がある。枯渇しつつある水路からの給水を補う意味で重要な役割を果たしたであろうが、最終的にレンガなども含む近代の廃棄物で埋没している。疎水開削にともなう一帯の近代化過程で、もはや耕地ではなくなった一帯では不要となり、廃絶したとみられる。岡崎における近代のはじまりを象徴する推移といえよう。

今回の発掘調査と遺物整理作業は伊藤淳史と富井眞が担当し、長尾玲が補佐した。また、磯谷敦子・西田陽子・高山典子・石田真葵・岩永玲・板垣優河・田中龍一・菊池望・式田洸の助力を得た。出土木材の樹種同定については、杉山淳司氏（生存圏研究所）の指導のもと西原和代（文学研究科博士後期課程）が担当した。今回は関連する一部結果の引用提示のみとし、全体の詳報は次年度におこなう。

本章は、第1・4節を伊藤、第2・3節を富井が執筆し、伊藤が調整編集した。

〔注〕

(1) 図39-A地点以外の周辺調査成果は、以下の文献に報告されている。

地点B：六勝寺研究会1973『延勝寺跡』

地点C：竜子正彦1999「8岡崎遺跡・延勝寺跡」『京都市内遺跡立会調査概報平成10年度』

地点D：熊谷舞子2016「VI尊勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成27年度』

地点E：梶川敏夫1987「14尊勝寺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』

地点F：上村和直・西大條哲1994「29尊勝寺跡・岡崎遺跡1」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』